

座 談 会

訊きたいことども

構成：編集部

青春のパライストラ

Ⅰ 「パライストラ」とは

本書のメインタイトルを、なぜ、「青春のパライストラ」としたのか、その説明が要るだろう。

古代ギリシアでは、レスリング学校・レスリング練習場のことを、「パライストラ (Palaistra)」と謂った。そして、レスリングのことを、「パレ (pale)」と呼んでいた。語源は、語感からも判るように、いわば「青春の道場」であったパライストラに由来する。さらにギリシア神話はレスリングの発祥について次のようにも語っている。

青春時代をアルカディアの森で生活していたヘルメスの娘「パライストラ」がレスリングを発明した。全世界はこの発明を喜んだ。鉄の武器が男たちの手から投げ捨てられ、競技場が、兵隊の陣営よりもずっと繁栄するようになったからだ。男たちは、戦場でよりも、裸で競うようになるであろう。

本書の裏表紙に「パライストラ」の平面図をレ

イアウトしてある。図の下側の「目盛り数字」でおよその規模が推定できるだろう。その図は、ギリシアのオリンピアで発掘された、パライストラの復元図である。縦横は「66.35 mと 66.75 m」であって、建物は比較的傷つかずに残り、ほとんど完全な姿に復元できている。2500年ほど経って蘇ったのである。レスリングはこの建物の中央「中庭」の「固い地面」のうえで行われたようだ。周囲はドーリア式とイオニア式の柱廊で囲まれている。そこに浴室、青年の部屋、油置場、審判員室などがあった。ここに大勢の青年が、そして指導者たちもが、集まりきたのである。やがてその場は、ジムナジオンとも併せて、遠来の「塩」を売る行商人などが各地の新情報や文化を携えてやってくる要所となり、その情報交換の基地として発展し、「学校」の起源ともなる。

自らを鍛える意志をもつ若者と、若者を支援する人々と、未知の情報が集まり来れば、至極のように学問の場が誕生するということだろうか。人間はこうしてレスリングと学問を行ってきた。それは人間形成のためであった。

関大レスリングの半世紀もまさにそうであっただろう。その「意味」を込めて、本書のタイトルに、この由緒ある固有名詞「パライストラ」を借用することにしたわけである。本書に収録した「内容」には、まさに、関西大学レスリング部健児たちの、一人ひとりが培った「意味」が燦然と光っている。輝くばかりではなく、その「意味」は、一人ひとりの関大レスラーたちの、胸に肌に血潮に身体髪膚に、隈なく深く根強く、沈潜するかのように肉化してしまっていることだろう。本書の編集方針は、その「意味」を、さまざまな角度から捉えることに最大の重点を置いている。すなわち、編集の意図は、「正史」を残すことにある。

II 座 談 会

「座談会」出席者

木村 正三氏（昭和27年卒）
 押立 吉男氏（昭和28年卒）
 清谷 利次氏（昭和30年卒）
 横山 勝利氏（昭和31年卒）
 柏木 貞夫氏（昭和33年卒）

司 会 編集部

日時：平成9年11月24日午前8時～12時
 会場：大阪厚生年金会館

訊きたいことは、まだまだ、山ほどある。関西大学レスリング部の半世紀をともに歩んできたすべての方々の「本音」を収録できないものだろうか、と、編集部ではもどかしさを覚えながら、やっと、ここまで仕事を進めることができた。だが目

処がつかけてくるにしたがって、あれも、それも、これも、訊いておくべきだったと思えてならない。そこで、木村正三さん、押立吉男さん、清谷利次さん、横山勝利さん、柏木貞夫さんの5名の方々に、さらに訊きだしておきたいことを語ってもらうことにして、本書の跋文にかえさせていただくことにしたい。

1. 現役時代の思い出

編集部 本日の記念式典を控えてお忙しいところを、座談会のために、早朝から集まっていただき、まことに有り難うございます。関大レスリング部の「創部50周年」を迎える機会に、どうしても訊いておかなければならないことに焦点を合わせてお尋ねしますので、よろしくお願いします。半世紀といえば、時代相もその間に大きく変わり、かなり以前のことでしたが、「化石人類」とか「新人類」とかと表現して、特に若者「新人類」の立場から、おじん・おばん「化石人類」とのコンタクトに「ブッスン」というようなことが流行語としても問題になりました。幸い、「レスリング」という共通理解のための絆が、関西大学レスリング部の半世紀には一本とおっています。そうたやすく我々レスリング仲間は「ブッスン」することにはならないと自負してもいます。だが時代はやはり大きく変わりつつあります。そこで本日は、関西大学レスリング部の揺籃期から充実期を貫いて、ご活躍された先輩たち5名の方々に、21世紀の後輩たちに託すためにも、本音のところを語っていただきたいと思います。まず我がレスリング部OB会長の清谷さんから、さっそく「現役時代の思い出」について、お話しください。

清谷 私が入部した年は、全日本級の下村主将（現・木村正三）に稽古をつけてもらうことが多かった。下村さん（以下は「木村」という。）の技は、村田監督（関西大学初代監督）直伝の切れ

味の鋭いタックル、足取り、巻き込みなどの多彩なものだった。もうまったく歯が立たない。自由自在に攻められて、辛い修行の毎日でした。高校時代、私は、相撲をやっている、大阪代表として全国大会、国体、選抜大会などの「場」を幾度も踏んできていたのだが、その自信は泡沫のように消え去り、退部を考えたりしたこともあって、親父に話すと、「あんたの船はもう港を出たんや、故障でもないのに引き返すのか、男やで……」とポツリと諭された。その一言が、私を、踏みとどまらせてくれた。木村先輩のお人柄は練習では厳しく、試合では闘志溢れる方でしたが、レスリングを離れれば、心の優しい方で、現役時代も、現在なお、私は、甘えた気持ちで気安くお話をさせていただいています。いつも目を細めて受けとめていただいていたので、感謝の気持ちで一杯です。



写真▷記念式典で「式辞」を述べる清谷さん

編集部 いま清谷会長から入部の動機が語られました。木村さん（実質上の初代主将）はなぜ関大でレスリングをすることになったのですか。

木村 そうねボクは、日本大学大阪専門学校でレスリングをやっていたのだが、そこでレスリングをやっていた連中は、関学が同大へ進学すると

ばかり思っていたんだネ。両校は関大に先立ってレスリングを始めてるので、先輩も既に入學していて、勧誘されるわけですヨ。ボクの関大入学は昭和24年です。関大レスリング部はその1年前の昭和23年に創部されている。監督さんが、明治大学OBで、あの天下の村田恒太郎さん、その村田さんが目当てだった。これが入学動機かな！入学するといきなり「主将」に任命された。経験者だったし年齢も上だったからネ。部員も少なかったこともあって、毎日、村田さんとのマンツーマンの練習でシゴキの連続だった。お蔭で強くなりましたがネ。だがその1年は主将としての重責に耐え忍ぶばかりだったナ。関大レスリングの大きな転機は昭和25年の夏合宿だったと思う。この合宿で部員が大きく成長した。皆に自覚ができたんだネ。それまでのボクは、ひたすらに、耐える主将だった。だがこの部員たちの自覚が、「飛躍する主将」の誕生の可能な実力を整えた。翌26年度からは、安川君が、その大役を引き受けてくれました。ボクはまだ4回生だったが、そのほうが部の活性化につながると思ったもんでネ。とにかく上京して試合をするにしても「食券（米穀統制時代のために米の引換券が必要だった。）」を持参した頃でしょう。腹はへるしレスリングとは「苦しい」でしか表現できないこととと思っていたネ。とにかく食糧事情が悪かった。経済事情も悪かった。各自がアルバイトをしながらの練習だった。いまから考えれば部員たちはよく頑張ったものですヨ。

編集部 合宿はいつの時代にも、飛躍の場、なんですね。さて押立さん（日本レスリング協会副会長）は天才ジュニア選手として脚光を浴びていましたね。その潑刺としていた頃の思い出の名勝負の一番なども訊かせていただけませんか。

押立 私にとっては、敗戦国日本がスポーツ界の国際社会復帰を許された昭和25年の7月、甲子園プール特設リングで開催された「日米親善国際

対抗関西戦」が思い出に残っています。相手は昭和23年のロンドン・オリンピック大会第2位のクリステンセンスでした。彼に対して、前半のリードによって苦戦しながら、判定で勝った試合が終生忘れることのできないものなのでしょうね。ときに関大2回生若干19歳でした。全日本代表選手では最年少でした。もっともいまでは67歳の老体ですがね……（笑い）。先程、木村先輩が、「合宿」の効用を説きましたが、まさに、私のときもそうでした。昭和24年の春季リーグ戦の関大デビュー戦でいきなり初優勝。秋は2位だったですね。私の1年のときでした。翌春は関大がまた優勝。こうして関学との宿命の対決が始まりました。そして私が3年のときは、春秋とも、関学に負けている。主将になった翌年、この3連敗を跳ね返すために、「15日間の長期春季合宿」を行いました。物資の乏しいときでしたが、自炊で頑張ったものです。木村勝マネージャーのお父さんが関大レスリング部の後援会長をしてくれていて、何かと篤志を頂戴しました。夜は統制で電灯もつかない。真っ暗闇のなかで、打倒関学のために、毎晩作戦会議でした。お蔭で優勝を奪回できた。この合宿は効果観面でした。学生レスリングの「華」はリーグ戦ですね。すると、合宿は「苗床」ということになりますか。

編集部 なるほど苗床ですか。ならば「青春のパライストラ」は人生の苗床ですね。ところで横山さん（関大レスリング部OB会副会長）も現役時代に数々の国際試合で活躍されましたね。印象深いところを訊かせてください。

横山 昭和30年度当初は、私が主将だったので、この年に幸運にも海外遠征が続いたために、途中で、その主将を坂寛明君（昭和31年卒）に交代してもらうことになった。海外遠征のために留守ばかりで部に迷惑をかけるばかりでした。留守を預かってくれた坂君たちのお蔭で、この年は、

春秋リーグ戦を圧倒的な勝利で連続優勝してくれた。これが、嬉しかったですね。私個人としては、やはり、ポーランドのワルシャワで開催された「国際青年スポーツ大会」の出場がいろんな意味で思い出に残っています。松井さんが「30周年記念誌」で、決勝戦で優勢に試合を進めていたのでそのまま流せば（わずか30秒たらず）優勝できたのに、余りにも勢いにのりすぎてゴング寸前に相手の捨て身の「かわず掛け」で逆転されてしまい2位だった、とこのときの模様を報告してくれています。ほんの一瞬の一発で何が起こるかわからん、これは人生の教訓になる、といまでも実感しています。また同じ30年の米国遠征に、1年先輩の清谷利美先輩（現OB会長清谷利次氏の双子の実弟）と一緒に遠征しましたが、その清谷さんはこの遠征がきっかけになって、日系2世のメイ・清子さんと結婚することになって米国で大いに活躍されました。その後の米国遠征にでかけた日本のレスリング関係者は、大いに、清谷ご夫妻にお世話になったはず。平成2年に、その清谷さんが、米国在住のまま突然の病（やまい）で亡くなってしまった。残念でたまりません。ご冥福をお祈りします……（一同黙禱）。



写真▷米国遠征の清谷利美さん（中列中央）と横山さん（中列左から3人目）：前列左から3人目は力道山：昭和30年ハワイ・オアフ島にて

編集部 横山さんは、その両方の遠征について、当時の詳しい記事を寄せられていますね。大変な観察眼をもって書かれた比較文化論になっています、それは一級の資料です。

横山 そう、「サンケイスポーツ」に、中国経由でソ連からポーランド入りした様子を報告しました（注：77頁に掲載）。当時スポーツ選手でこのルートを通じたのは初めてのことで、喜んでいただきました。また、「関大スポーツ」には、清谷利美先輩との共同執筆で、2カ月間にわたる米国遠征の記事を送りました（注：214頁に掲載）。これも珍しい記事だということで大変喜んでくれました。内容は、本書にも紹介されると聞いていますので、確かめてください。



写真▷記念式典で「開会の辞」を述べる横山さん

編集部 柏木さん（関大レスリング部OB会幹事長）は高校時代から兵庫県で鳴らした名選手ですが、当時の高校で、どんな動機からレスリングを始めたのでしょうか。

柏木 私は、昭和26年に神戸市立鈴蘭台高校に入学しました。当時同高校では各種の校内大会があり、レスリング大会で私が1年生ながらフライ

級で2位になりました。そんなことでレスリング部から強烈的な勧誘があり、珠算部員の私も、ついに入部せざるをえなくなった。もうひとつの動機は、精神的なことだった。戦後の学校教育は、戦前・中の軍国主義から平和と事由で平等の教育に変わった。習慣というものは恐ろしい。何か物足りなかった。そこで以前の軍事訓練に相当するものとして、厳しいスポーツで身体を鍛えようと思っていた。そんなわけでレスリングもよろしくろう始めました。その後は県内の試合は2軍で争えるレスリングの名門校の主将となっていました。そして昭和29年に推薦を受け関西大学を受験することになりました。合格者発表の日、千里山に向かう電車の中で、当時の金輪マネージャーに偶然お会いいたしました。金輪先輩が「君は合格している。今から新人歓迎会に行く。ついて来い」と言うことで電車を乗り換えて天六に向かいました。そうして始まった歓迎会では「君は合格者を代表して挨拶せよ」と言われ、何か狐につままれたような1日であった。ここから関大レスリング部の活動が始まりました。私は皆さんのような立派な成績はなく、全日本グレコの第1回2位、全関西の優勝ぐらいです。ただ、4回生の時、同窓の乾哲夫君と渡米選手に選ばれましたが、自から辞退したことが今になって多少残念に思うところもあります。しかし、その当時はそのエネルギーを社会に出て仕事の面で活かそうと決心しました。もし、渡米を決心していたら私の人生も変わっていたかも知れません。

2. 学生時代はどんな時代でしたか

編集部 先程既に、木村さんから、押立さんからも、当時の時代相について、ちょっぴりお話がありましたが、今度は、話題をその時代相に変えて、エピソードなども交えながら、紹介してく

ださい。まず木村さんから、どうぞ。

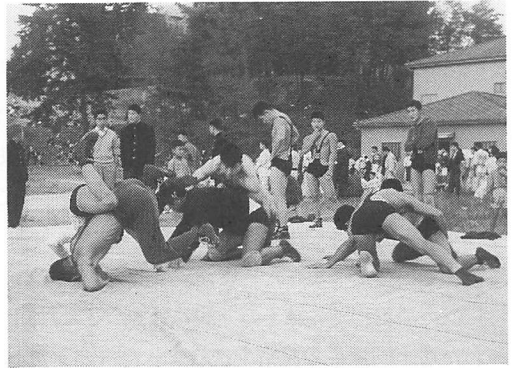
木村 現在のような素材の素晴らしいマットがない時代でした。トラックの荷台に使う「帆布」(昭和35年頃まで帆布をマットカバーに使っていた。)を、部員がアルバイトをして、やっと調達したものです。だが目の荒い布なので擦過傷の生傷が絶えない。それでも、みんな、手に入れたときは小躍りして喜んでいたなア…。破れれば縫う。とにかく「物」を大事にしたネ。東京へ遠征するにしても、車中では、コッペパン一つが食事だったなア。飲み物は一升瓶に「水」を詰めて持ち込んだりしたネ。「♪若く明るい歌声に……」と、戦後当初のヒット曲『青い山脈』を、誰もが街角で口ずさむというように、解放感だけは漲っていたものの、特にレスラーたちには、とにかく猛烈に「腹のすく時代」だった。当時は娯楽があまりなかった時代ですからネ、学生レスリングのニュースも、よく新聞が採り上げてくれた。この古新聞を見てヨ！もってきたんだ。こんなに大きく採り上げてくれるので励みになったなア。

◇

編集部注：昭和24年7月5日『スポーツ日本』(タブロイド版)の表紙を見せてくれました。その写真は本書の「71頁」に収録してある。「巨体スッ飛ぶ」と題するその写真は、当時の村田監督が、当時の下村主将を、パンケーキという米国渡来の荒技で投げ飛ばしている図。その左下隅に「来る九月東西対抗レスリング戦に備え関西側はいま猛練習の最中、フェザー級の選手権保持者村田君の腕が下村君の首にかかったと見るや、《居ぞり》一番、下村君の巨体は宙にスツ飛んだ(きのう曾根署リンクで)」と説明がある。

◇

編集部 時代相を語ってもらっているのですから、次はやはり卒業順にお願いいたしましょうか。その方が脈略がはっきりしますね。押立さんは学生時代にどんな経験をしましたか。



写真▷帆布のキャンバスで練習・昭和35年当時

押立 私は、昭和21年に旧制中学(現在の大阪市立高校)4年からレスリングを始めました。「部活」としては、おそらく、日本で最初のことだと思います。戦争中は、柔道をしていました。敗戦後、アメリカ軍の命令で、学校柔道が禁止されましたので、裸の柔道、すなわちレスリングを、中学校と大学を通じて同期の、木村(晴)、黒木君たちと一緒にやりだして、中学生ながら全日本に出場したり、もちろんインターハイにも出場しました。関大への入学動機は、恩師小田原先生の「常勝関学に勝つチームをつくるために、関大へ行け」の一言でした。当時戦後の混乱期で今の若い人たちには想像もつかないほど交通事情が大変悪かった。全日本選手権大会に出場のために上京するには「明星」「彗星」などの夜行列車で9時間を立ったままとか、通路に座り込んだり、寝たりしたものです。東京ではよく明大白雲寮に泊まるために、村田監督(明大OBで当時は関大の初代監督)や、明治大学在学の中学(現大阪市立高校)のレスリングの先輩などにお世話になりました。食糧は、食券制で食堂に列をつくって、やっとありつく始末でした。寮でのスイトン(だんご汁)は本当に美味しかったですね。もちろん減量もし

ました。家族から特に母親に、なぜ腹の減ることをするのか、しかも体重を落とすとは……、とよく叱られたり、不思議に思われたりしました。

編集部 木村さんも押立さんも「腹のへる」時代の話をしてくれましたが、現在の学生には理解できないでしょうね。ところで、清谷さんは、国際試合のあるレスリングに憧れて入部したとお訊きしたことがありますか……。

清谷 私が弟の利美とともに入部したのは昭和26年で、日米講和条約が締結され、日本は独立国として国際社会に復帰した記念すべき年でした。当時、大阪では、地下鉄御堂筋線の天王寺駅から我孫子駅への延長工事が行われていましたね。それも、今では見ることでできない、露天掘り工法でした。私は、大阪防水建設社（昭和28年卒宇賀照夫さんが現在の社長、当時は宇賀さんの父親：宇賀龍雄さんが社長で、関大レスリング部の後援会長だった。）で、アルバイトとして、その地下鉄工事の手伝いをしたことがある。現在の充実した地下鉄網整備に向けての初期工事がこの頃から始まり、ちょうど昭和26年といえば、大阪復興の槌音が高らかに響きはじめた年ではなかったかと思います。入部のきっかけの一つは、入学前年の昭和25年甲子園プールで開催された日米対抗レスリング大会（注：関大関係者はフェザー級の村田監督、ライト級の下村さん、フライ級の押立さんが出場して大活躍・前出の押立さんの対クリステンセンス選手戦はこの大会で。）を見に行ったからでした。会場は明るくてとても華やいだ国際試合での雰囲気がぶんぶんしてましたね。しかも相手は「富める国」「強い国」のアメリカ選抜軍、この猛者を相手に、遜色なく闘っていた日本代表チームを目の当たりに見て、その頼もしさに興奮してしまいました。私には、当時、複数の大学相撲部から入学勧誘の声がありましたが、国内だけの相撲より、国際的な活躍の場があるレスリング

に、より魅力を感じてしまった。そんなときに、大阪市立中学相撲部出身の、関大レスリング部を創設した、安川健次さん、宇賀照夫さん、友田次朗さんなどの先輩からのお誘いがあって、関大でレスリングを始めることになりました。

編集部 横山さんは写真や新聞切り抜き記事などの貴重な資料をお持ちですね。今日もいくつか持参してきてもらいました。ここに当時のトレーニング風景を伝える記事『サンケイスポーツ』があります。紹介してください。

横山 先程紹介しましたポーランドでの「国際青年スポーツ大会」でも、エジプトの選手がグレコの練習をしていて、それを初めて見た日本選手は驚きました。なにせ「首」が強い。身体が柔軟ですね。いまでは「バック投げ」とかの技の名前もあるようですが、とにかく初めて見たので、その荒技ぶりにビックリしてしまいました。大の男を胸合わせに持ち上げて、そのまま後方に反って、大きなブリッジをして相手を投げ飛ばす。2人分の体重を「首」ひとつで支えて投げる。彼らはフリースタイルにも出場すると言っていました。これは、これからのトレーニング方法を変えなければならぬと思いましたね。その様子も例の「報告書」に書いておきました（注：本書「77～78頁」の「横山手記」を参照）。その頃有り難かったことは、先程の木村さんのお話のように、「新聞」がレスリング関係の記事を盛んに載せてくれました。それも大きな紙面を割きました。これは、昭和30年の6月10日の『サンケイスポーツ』の記事で、「トレーニング百態」という連載記事でしたが、「レスリングの巻」を紹介したものです。取材は「関大道場」で、ですよ。新聞4半面の大型記事です。どうぞ見てください……。

柏木 そうですね。昭和30年代の前半頃までは新聞社がレスリングをよく取材してくれました。

そう言えば、明治大学レスリング部OBの山村さんが毎日新聞の運動部記者で活躍していました。現在編集集中の「50年史」の新聞資料の多くはその山村さんの取材記事のはずですよ。

◇

編集部注：その記事は、タイトルが「トレーニング百態」で、サブタイトルに「レスリングの巻」とあって、大きな文字のミダシには「重点は首、腹筋の強化」「昔とかわらぬ練習法」とある。そのリード文をそのまま引いておこう。

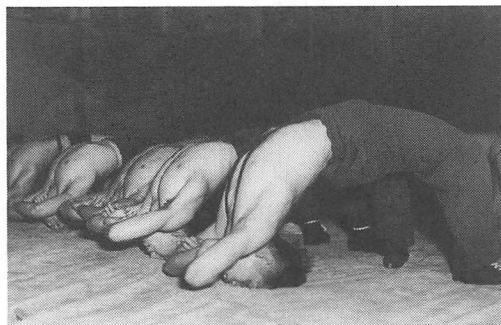
◇

今年のはじめにアメリカへ渡った横山（関大）岩野（同大）らのレスリング選手団が、全米選手権や西部選手権など輝かしいお土産をもって帰ってきたのが、二カ月前のことだった。ちょうど選手たちの母校の道場（関西大学千里山キャンパス）では、学生リーグに備えて猛練習が行われており、監督さんは渡米選手にアメリカ仕込みの練習法を教わろうとしたようだが、結局とりたててスケジュールに加えるほどのものはなかったようだ。やはりトレーニングの重点は、昔からやっているように首や腹筋の強化に向けている。（記事）

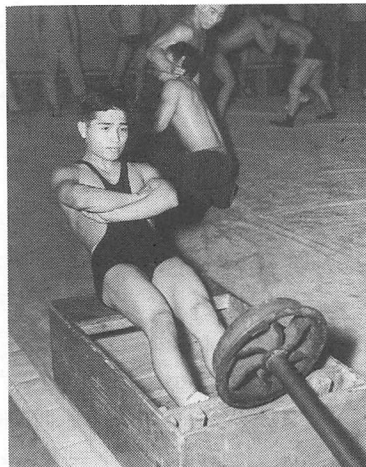
◇

上記のリード記事に大型の写真が3枚掲載されている。その写真説明は「上」「中」「下」とあってそれぞれ説明がゴシック体で書かれている。

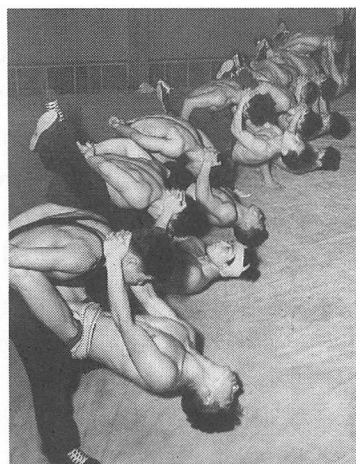
◇



（上）ブリッジと呼ばれるこの運動、頭と両足とで体を支え、文字通り橋の形を作る。レギュラーになると十七、八貫（編集部注：1貫=3.75kg）ぐらいの人間を、腹の上に乗せても平気。（写真「左段下」の説明）



（中）腹筋の運動にはボートのバグ台と同じようなこともやる。ボートの場合は四十五度ぐらいで止まるが、これを一ぱいに反りかえるため、苦しさはケタ違い。（写真「上」の説明）



（下）ぶら下がっている選手は首にまいた手に全体重をかけている。立っているほうは“イチッ”で上体を起こし、“ニイッ”でまた写真のような形になる。十回も続けたらたい

いの人間はフラフラになるそうだ。(写真「上」の説明)



編集部 腹筋運動をしている横山さんの写真がありますね。その腹筋台とその前に写っているバーベル代わりの「トロッコの車輪」は、たしか昭和37年頃まで使っていました。私たちも愛用していました。その横に、自動車の古タイヤをいくつか置いてましたね。部員たちはスパーリングの合間の時間を工夫して、腹筋台やトロッコ車輪で思い思いにプラスアルファの練習をしたものです。また古タイヤに乗って、次のスパーリングまでの、10分間ほどを、身構えてフットワークの練習をしたりしました。それぞれが工夫したものです。自転車の古チューブを引っ張るトレーニングで腕の引く力を鍛えたり、その古チューブを適当に裂いて、膝に巻いて、サポーター代わりに使ったりしました。まだまだ昭和37年頃までは、「物」が無かった。だから工夫したのでしょう。すべて自前で作るか、廃物利用でした。私達の時代にも、大きな空きカンをいくつも調達してきて、それに小石とコンクリートを詰め込んで、そこに鉄棒をとおして固め、60キロ用とか30キロ用とかのバーベルを作ったことがあります。

押立 私の時代は、さらに「物」がない。だから「レンガ」を両手にもって走りながらウエイトトレーニングをしたりしました。さらにバランス感覚を鍛えるために、市電のレールの上を、そのレンガをもって走ったものです。

木村 いまから考えると、物のない時代には、誰もが創造性を発揮しましたネ。それを思うと、物の有り余る現在の子供は、工夫することを知らん、実に不幸だ……。ボクなどは、レスリングを通じて、その工夫でもって、全人格を作ったようなものだ。だから、どうですか、このとおり、いい男でしょ(笑い)。



写真▷記念式典で「代表挨拶」を述べる木村さん

編集部 へえっ、木村先輩はレスリング漬けですか。それでも現在の木村先輩が在る。やはりレスリングは偉大ですね(笑い)。当時の関大レスラーは文武両道だったと聞いておりますが、柏木さん、その辺の事情はどうなんですか。

柏木 私もちろん猛烈に「腹のへった」時代の申し子です。学生食堂へは、「米」を自宅から持参して届けて1合3円の加工賃を支払ってライス1皿、オカズはジャガイモのコロッケ2個と野菜少々で15円、ハム2枚と野菜少々で20円、そんな昼食だったですね。たしか、キツネうどんが20円、天麩羅うどんが30円だったように思います。当時は粗食のレスラーでした。これを一言で比喩すれば「肉食の外国人・麦飯の日本人の闘い」でした。ところで私は三田市の広野から関大に通っていました。通学の時間は片道3時間はかかる。朝は毎日6時頃に家を出る。最終列車は国鉄大阪駅を7時24分発でした。そのため、春秋のリーグ戦や試合の日などで帰宅できないときには友人宅にお世話になったものです。列車で1日5時間近くも揺られるんですから、車中では本をよく読みました。練習もよくしたが、とにかく書物

をよく読んだ。いまから考えると、本当に「列車さまさま」です（笑い）。私の場合は「列車図書館」のお世話になりましたが、当時の関大レスラーは、みなさんそれぞれ工夫しながら勉強していたようですね。新興日本の先頭に立つという精神が漲っていたからでしょうか。すべてにわたって中途半端ではありませんでした。木村さんも多読家ですね。

3. レスリングとは何だったのか

編集部 先程、「物の無い時代にさまざまな工夫をした」というお話が出てきました。関大レスリングは、一面では、グレコの関大と異名をとりましたね。その下地は既に本日の座談会にご出席の先輩方が作られておりました。押立さん（フライ級）はグレコの国際試合での日本最初のメダリストでした。昭和29年の全米選手権大会で銀メダルを獲得されました。横山さん（フライ級）は、先程のポーランド遠征のお話にもありますように、ご自身はフリーで銀メダルを取る活躍をされたのですが、ついでに現地で仕入れた本格的なグレコのトレーニング法を日本に伝えてくれます。その横山さんはその年の全米選手権大会でグレコで優勝してますね。柏木さん（フライ級）は、同僚の乾さん（ウエルター級）とともに、昭和32年の全日本選手権大会で、それぞれ第2位の銀メダルに輝いている。そして市口さんの東京五輪の金メダルへと続くことになりました。しかし日本でグレコを本格的にやりだしたのはローマ五輪前後からでした。その頃の関大レスラーはさまざまな工夫をしました。本格的になりますと、グレコの主流の技を使いだすようになる。つまり、先程も横山さんが指摘した「バック投げ」系統の後方に反って投げる技です。そのため、反りやすく工夫するために、レスリング靴の中に細工したりしました。特別な中敷きを作って、踵の方へ傾斜をつけて、後方に反りやすくしたりしました。

結局は実験段階だけに終わりましたが。当時の八田会長が、この関大式発明品を見て、目を丸くして驚いていました。「関大のレスラーは凄い、これは科学だな！」ってね。そのような工夫をする大学はどこもなかったようです。関大には、そんな、下地があったように思います。さて、皆さんにとって、いったい「レスリングとは何だったのか」を次にお訊かせください。これからは順不同でご自由に、どうぞ。

清谷 昭和26年秋のリーグ戦に初めて出場したときの経験ですが、会場は確か西宮体育館だったでしょうか、私にとって思いがけない出来事が起きました。対関学戦を前にして、関大の選手は、「水杯」を交わしました。25年秋と26年春秋とも連敗していましたからね。必勝を期しての行動だったと思います。重苦しい雰囲気の中で一層と緊張したのを覚えています。この「水杯」は、当時の部員の勝負にかける純粋な心意気と真剣さを表している行動として貴重な体験をさせて貰ったと現在でも思っています。現在の若者は、この行動を、どのように捉え、どう解釈するか判らないが、この関学戦に賭けた意気込みの凄さは、いまなお、背筋にピンと感じます。その「純粋さ」は、今日の社会にあって、一考の価値があるのではないか。その経験以来、私は社会人になってからも、何事に対しても、純粋な気持ちで全力を傾注するように心掛けています。話はレスリングから離れますが、私の子どもたちの学校でPTAの仕事をお手伝いさせていただいたときなども、この気持ちを忘れずにお世話させていただきました。ご承知のように「日の丸問題」なども含めて調整の困難なことが多々ありました。だが私の姿勢「純粋さ」を判ってくれたのでしょうか、さまざまな考え方のある集まりでしたが、難しい話もわりと簡単にまとまったような気がしています。ともかく、私にとってレスリングとは、その「純粋さ」を教えてくれた存在です。

編集部 懐かしい言葉「水杯」が出てきましたね。しかし現在の若者のために補足説明が必要かもしれません。とにかく現在の大学生の8割ほどが「西向く士」の意味も知りませんし、そうした暗記法を聞いたこともないようですよ。

木村 えっ！ほんとっ。2月・4月・6月・9月・11月の覚え方を知らないの？。それでは「水杯」も死語になってるのかな？。若者よ、判らなければ、辞書を引きなさいとだけ申しておきましょうか。特にレスラーは、何事も、判らないままに放置したら駄目。自分で工夫して発見しなければ本物にならない。判らないときは、調べろ、調べろ。ではついでにボクも語っておこうか。あらたまと私は、多くを村田恒太郎さんに、教えていただきました。来る日も来る日もマンツーマンで練習したこともあるからなア。しかも2人きりの練習が続いた。天六の地下教室でネ。とにかく村田さんは当時日本一の強者でしょう。皆も知ってるでしょう。村田さんの自伝『俺』を。その本でも、「『俺』は強かった」と豪語する章を書いている人ですヨ。『俺』は生涯で、2ポイント以上取られた事はない。負けた奴も5本の指に余るから強かった？はずである」と村田さんは書いている。とにかくフェザー級の選手なのに全日本級のミドル級の選手をやっつけたりするんだな？。その村田さんと、毎日ぶつかり合い、しんどかったナ。ほらここに「30周年記念誌」があるだろう。こう書いておいたよ。「(天六の地下の一室の練習場の)薄暗く、埃っぽい、寒々とした中で、若い力『エネルギー』が毎日、毎日ぶつかり合い、燃焼していたのです」とね。本当に燃焼したな？。その村田さんから、現在なお、多くを学んでいます。ゴルフもネ。だが村田さんとのお付き合いは、レスリングでもゴルフでも人間を語ることが多かった。レスリングは好きだからやる。ゴルフも好きだからやる。やり抜けば、答えは自ずから出てくる。それが村田さんや関大の仲間た

ちから学んだボクの哲学です。ところが村田さんとの邂逅で習い覚えたことは、その好きだからだけでは駄目だと言うんだネ。好きなことは手前勝手のこと、その好きなことを介してお互いに付き合っているならば、人間観察をせヨ、そこから学べと言うんですネ。はい多くを学びました。ボクはレスリングで「人間学」を学びました。



写真▷記念式典前・談笑のひととき

右から＝高堂部長・村田さん・木村さん・東さん

編集部 邂逅と言え、横山さんは多くの海外遠征で、たとえば、笹原さん(日本レスリング協会会長・メルボルン五輪金メダリスト・JOC副会長)のような同時代の名選手と同道していますが、そんな経験談で面白いお話はありませんか。いま木村さんが「人間学」の機微に触れて語ってくれました。そんなところを訊かせてください。

横山 鮮明に残っている印象は、やはり、笹原さんのことでしょうか。先程のポーランド遠征のときですが、なにせ昭和30年のことです。当時の国交問題も絡んでいた、北京・モスクワ経由で、お目当てのワルシャワ入りをしたのでした。その遠征で北京と各地で笹原さんの行動に感心したことがあります。笹原さんは走るのが速い。

速いばかりでなく、たとえば飛行機の乗り継ぎ時間やホテル到着直後などの空き時間を利用して、常に走る。訊けば、時差ボケ調整の自己流コンディショニング法だと言っていました。感心して皆が真似るようになった。それに、ワルシャワ入りしてからの選手団（陸上競技4名・レスリング5名・体操2名・卓球2名）の調整で、笹原さんは常に陸上選手にまじって走っていましたね。選手団長は、あのアムステルダム五輪の三段跳び金メダリストの織田幹夫さんだった。その織田さんが笹原さんの走り振りをみて驚いた。何せ陸上競技の選手よりも速いかもしれないほどの走り振りだった。もうひとつは北京での話です。8月のことで、真夏の北京は、大変に暑かった。寝ていても汗が吹き出す。寝れなくて皆が閉口してしまいました。ところが笹原さんは平気な顔をしている。訊けば、毛布をもって屋上にのぼり、星空のもとでぐっすり寝たそうです。すべてに合理的なんですね。これも勉強になりました。ところで、私自身は、この遠征では戦後のスポーツ選手として初めて「中国・ソ連経由」でポーランド入りしたわけですが、レスリングのお蔭で、そんな時代の裂け目のようなときにしかできない経験を数多くさせてもらいました。本当に感謝しております。

編集部 八田さん（日本レスリングの総帥・八田一朗氏のこと。1983年没。八田さんはFILA副会長・日本協会会長・参議院議員などを歴任）は、「アメリカ人も日本人も糞をするときは同じ顔をする。気後れするな」「スープはブーブー音をたてて、のむな。そんなことでは一流の国際人になれん」「レスリング会場にガールフレンドを連れてこい。そうすればレスリング人口が直ぐに2倍になる」「ライオンと睨めっこしても負けるな」などなどの八田イズムを数々残しましたね。その中には、戦後総懺悔の日本人のアメリカコンプレックスを吹き飛ばす箴言も数多くありました。とにかく、外国遠征の直前には、一流レスト

ランに選手団を集めて、テーブルマナーから握手の仕方までを直伝する。大いに感化されたことも事実です。また真冬の寒中水泳や夜中の突然の練習招集などの奇策も随分と使ったが、そんな八田式練習法からも、我々は多くを学びましたね。そしてそれぞれの大学で焼き直して工夫もした。そうした環境から日本のレスラーたちは多くを学んだはずだ。柏木さんはいかがですか。特に社会人の立場から振り返ってみると、どうですか。



写真▷記念式典「祝辞」の沼尻日本協会副会長
「先達と後人との架け橋をこの50周年で……」

柏木 正直言って、学生時代だけのスポーツと思っていたんですが、結果としては、人生の大半をレスリングに関係してきたことになる。それは、兵庫県レス協の副理事長兼事務局長として長年努力し、今は副会長です。また、神戸市レス協では理事長兼事務局長を務めております。特に、今年は神戸市体育協会で「50年のあゆみ」が編され、「レスリング」の紙面を執筆したのですが、そのための資料集めなどで大勢の方々にお世話になりました。そこで感じたことは、レスリングの人脈は濃密だと言うこと。たしかにOBも含めてレスリング人口は少ないのだが、縦も横も学閥を離れて、誰もが協力してくれました。関大レスリングOB会では、前回の「運営基金づくり」のときも、

今回の「50周年記念事業費募金」のときも、皆様のご理解のもとに多額のご浄財が集まりました。どこか気脈が通じたところを感じました。このOBの連絡網は大事にしたいですね。とは言っても、レスリングは、本務の仕事に忙殺されているときは、やはり重荷でもありました。けれども仕事に行き詰まったときには、オアシスのような存在であったこともたびたびある。現在では、兵庫県商工会連合会の仕事を定年で退職して、専門学校講師を第2の道として歩んでいますが、これからも、この人脈を大切にさせていただきたいと思っています。ところで関大レスリング部は、現在、「関関早慶」の4大学で定期戦を行っていますね。この日本を代表する4大学ですから、レスリングOBのネットワークを整備して堅固なものにすれば、これは素晴らしい大人脈になりますか如何でしょうか。

編集部 そうですね、「関関早慶」の定期戦を始めたときの構想は、いま柏木さんがご指摘したとおりに「レスリング大人脈づくり」目標が根底にありました。ところが4大学とも、まだまだかつての「本物」の域には程遠い。そこでなかなか氣勢があがらない、というのが実情です。しかし、ここ十年来の若手OBは盛んに連絡を取り合っています。我々もじっくりと見守って、これからの4大学の卒業生のためにも、その環境づくりを手助けしたいと思います。さて「人生の大半をレスリングで」という柏木さんのお話がありましたが、関西大学きっての「虫」は、やはり、押立さんでしょう。なにせご冗談に「レスリングを取ったら、私には、何も残らない」との言葉遊びを自らされるほどですから（笑い）。

押立 私は学生時代にアルバイトで聾学校の教員をしていました。また卒業後は大阪税関に就職しましたが、現在まで一貫してレスリングを続けてきました。その間、私の休暇は、すべてレスリ

ングのためにあるようなものでした。“What is the wrestling?” いったい、レスリングとは、私にとって何なんでしょうか。私には判りません。だが気がついてみれば現在のレスリング三昧の自分があるのみです。昭和53年、関大の伴先生ほか、関大OBの皆さんと一緒に、関大の地元吹田市に、「吹田市民レスリング教室」を創設しました。現在では、吹田市内の4体育館で、週5回、延べ250名の少年少女ちびっ子レスラーとともに、スパーリングで汗を流しております。お蔭様で、全国中学生大会で4年連続して複数の優勝者を出すなど名実ともに少年少女レスリングの日本一になりました。現在の横山博行監督のご子息3兄弟も元気で親子のスキンシップを楽しんでおられます。近藤君や西山君（共に昭和41年卒）などの皆さんからコーチとしてご協力を賜っています。しかし指導者不足には困惑しています。関大OBの皆さんに、是非とも、暇を見つけて応援してほしいものだと思います。



写真▷日本一になった吹田市民レスリング教室

4. 現在のレスリングをどう思うか

編集部 さて『青春のパライストラ：関西大学レスリング部50年史』（以下は、「50年史」とい

う。)の随所にレスリングルールの変遷史を紹介してありますが、皆さんは、現在の「5分間」というレスリングをどう思いますか。また、おしなべて日本の男性スポーツ陣は低調ですが、とりわけレスリングもこのところ、男性陣では日本レスリング史上で最悪の成績しか残していません。日本協会の強化委員長が「日本は、(総合で)22位となり1993年大会以来、最悪の結果となった」と1997年度の世界選手権大会を分析する始末です。一方で、昭和60年(1985)から始動した女子レスリングは、現在、世界の最強国になっています。また残念ながら、関大レスリング部も、今年度は西日本リーグ戦第2部の最下位となりました。その指導陣の一員として、この座談会にご出席の皆様にも、本日の午後の「創部50周年記念式典」に馳せ参じるOB諸氏にも、まことに申し訳なく思っています。そんなもろもろの実情も踏まえて率直に語っていただければと思います。まず日本レスリング協会の副会長を務めておられる押立さんからお願いいたします。



写真▷祝賀会で「万歳三唱」発声の押立さん
(大阪府レスリング協会会長として)

押立 私の座右の銘「力もまた技なり」からすれば、現在のレスラーは、「力」が絶対的に足りない。現在の現役選手(関大に限らず)は、皆が

皆、パワー不足です。いかなる高度な技も、すなわち「技術」もそれにとまなう「力」がなければ役に立たない。日本レスリングが国際レスリングから後れをとったのは、外国の「技術」よりも、パワーに、すなわち「力」に負けていると思います。東京五輪で金メダルを獲得した市口政光君(昭和37年卒)たちの体力と、現在の日本のトップクラスの選手たちと比較してみますと、そのデータに大きな差があります。昔の方が数段も優っている。これでは勝てません。筋力トレーニングによるパワーアップ、基礎体力の向上が必要ですね。特に自主トレーニングによるスタミナをつける必要を痛感しています。

編集部 日本協会の執行部として、その基本的な問題は、切実な課題ですね。前出の強化委員長の報告は、日本状況の異常を伝えてくれています。紹介しておきましょうか。これは、協会の姿勢とか、選手個人の姿勢とか、そんなことで解決のできない、なにか現在の日本全体の仕組みの中で起こっている不気味な現象のようでもあります。箇条書きして述べておきます。

- ① 日本の成績は、1993年以来、世界選手権大会で最悪だった。
- ② その原因は次のとおりである。
- ③ 合宿中怪我人が多かった。そのため、体力強化ができなくて、調整不足のまま出場した。
- ④ 選手の年齢層が高いので、各自にコンディショニング作りを任せた結果、思うような強化ができなかった。
- ⑤ その上、韓国やその他の国ではナショナルチームとして年間をおして強化している。
- ⑥ 日本の現状では、各所属チームでの練習が主で、ナショナルチームの合宿は、1ヶ月に1度ぐらいしか組めず、仕事の関係で、その合宿にも参加できない者もいる。
- ⑦ このような現状のナショナルチームの強化は難しい。

以上ですが、これは昨年（1997）の8月に行われた世界選手権大会結果の理事会報告の概要です、皆さんは、どう思われますか。

押立 社会全体の問題も含めて構造的な問題があります。しかし日本レスリング協会の最大課題ですので、執行部をはじめ関係者こそって、日夜頭を抱え、打開策を図ろうとしているところが実情ですね。残念ですが、決定策はいまのところありません。しかし関係者は責任をただ痛感するだけではなく、それぞれの足元において、地道に解決していかなければならないと認識しております。私なりには、少年少女レスリングをとおして、少しは時間がかかってもじっくりと取り組みたいと考えています。この問題は、これからの日本社会の動向を見据えて展望する必要があります。これは単にスポーツだけの問題ではありません。その自覚も万人にとって必要です。



写真▷祝賀会「挨拶」の松原全日本学連会長
「盟友よ誇りを抱いて立ち上がれ！」

編集部 レスリング部OB会長の清谷さんには、本日の式典で、式辞を述べてもらわなければならないのですが、そんなとき、関大レスリング部が史上最悪の成績を残してしまって、誠に申し訳ありません。できることなら、リーグ戦での優

勝を、その式辞に盛り込んで報告できたら申し分ないんですが、現在の関大レスリング部は、言い訳するものではありませんが、やはり最悪の状況です。男子部員5名・女子部員2名（うち1名はマネージャー）で細々とやらざるを得ない。しかも女子レスラーの1名を除いて、すべて大学からレスリングを始めた素人集団です。これは言い訳のつもりではありません。OB諸氏には、指導陣が弛んでるからと、お叱りをうけるかもしれませんが、これが実情です。この関大状況は抜本的に解決しなければならない問題ですので、別途にその再興問題を語るとしまして、清谷さんは、現在のレスリングを、一般的にどう思われますか。

清谷 我々の時代の試合時間は15分間でした。現在はその3分の1の5分間ですね。しかも試合の勝敗では判定試合が多くなっている。したがって「技」もフォールを狙っての技術展開でなくなっているように思われます。ところがレスリングそのものは、本来シンプルなユニフォームで、鍛え上げた肉体で正攻法で攻め合う競技だからこそ、力強さがなければいけない。先程も押立さんが強調していましたね。あの力です。テクニカルフォールを狙うことよりも、チャンスがあれば完全に相手をフォールしてしまう、力強さがほしい。そうならば格闘技としての魅力が復活するのではないのでしょうか。振り返ってみると、かつての日本選手は、足腰が強く、「股裂き」を得意技の一つとして、世界を制してきましたね。我が関大のOBたちも、こうして、世界に君臨してきました。しかし、戦後は生活の欧米化によって、特に昨今では体形も欧米人なみに、またそれにとまって足腰までもが欧米人のそれと変わらなくなってきている。日本人の強靱な足腰は、かつて、スタンドレスリングでの投げ技やタックルに、またグランドレスリングでの股裂きや足取りなどに活かされ、世界をリードしていましたね。これを忘れたのでは駄目。今後、足腰を強化するトレーニング

を積極的に行うべきでしょうね。まずは「為す事」が大切ではないだろうか。



写真▷祝賀会「乾杯音頭」の岩野西日本学連会長
「正史を礎に新たな創造を！……」

編集部 横山さんはどう思われますか。

横山 現在のことはよく判らないが、私どもの頃は、とにかくよく練習しましたね。先程の押立さんのお話でも、東京五輪時と現在とでは一般的に体力の差があって、しかも30年以上も昔の方が強かったそうですが、奇怪いことですね。東京五輪で活躍した世代はまだ物資の乏しい食べるものにも事欠いた時代の選手たちですよ。こんなに食生活も住環境もなにもかもが極端によくなっている時代の方が、体力的に劣っているなんてことは、基本的に奇怪い。しかも現在は科学万能の時代でしょう。いったいどうなっているのか。これは現在の若者に「ハングリー精神」が欠如しているからというような単純な問題ではありませんね。昔の「力」はとにかく猛練習で培われたことだけは確かです。正直言って、科学的なトレーニング法なんてあまり知らなかった時代なのに、現在より効果があったなんてやっぱり奇怪い。しかし関大のトレーニングは、先輩方の工夫の積み重ねで精錬されてましたね。さらに合宿などでの

猛練習振りは有名だった。多くの他大学生が他流試合よろしく、関大の合宿に、飛び込みで参加しましたが、2、3日経つと、一人消え、二人消え、合宿所から逃亡したりしました。とにかく忽然と消え失せるんですね。猛練習について行けなくて夜逃げしてしまうんですよ。関大レスラーはみなこれに耐えきった。この関大練習法は関東の大学までにも有名でしたよ。

編集部 いま関大について横山さんが触れられました。確かにかつての関大の練習法は合理的でもあり、そのうえに密度の濃いものでした。他大学のレスリング部に有名だけでなく、関大内の体育会全クラブにも鳴り響いていました。たとえば東京オリンピック前後の部員の自主トレが評判でした。あの第1グラウンドで、陸上競技部やアメリカンフットボール部やサッカー部などの練習している同じところを三々五々レスリング部員が走るんですね。腰に砂入りチューブをまいたり、手に鉄亜鈴代わりの何かをもって走る。モクモクと毎日走る。シングレット姿ですから一目で判る。グラウンド種目の連中は「走る」のが基本でしょう。その連中が驚くほどに、「レスリング」は走る。そして市口さんが東京五輪では金メダルでしょう。「レスリングはサスガ！」と見られてました。当時の部員の意識が高かったのですね。そうした「関大流練習法」は、関大レスリングが発祥してから、例の大学紛争直前まで伝統的に続いていました。ところが廃部寸前までの状態となったあの「第1次危機の時代」の大学紛争中を経て、今次の「第2次危機の時代」になると、すっかり様子が変わりました。特異な事例を1つだけ紹介しておきましょう。1995年頃から「第2次危機の時代」となり、今春の史上最低の「リーグ戦」記録を残さざるをえなかったときまで、「4回生皆無」の年が漸続的に何回かあるわけです。原因の1つは絶対的部員不足なんです、驚くような話が介在しています。1995年に我が部に史上初の「女

性レスラー」が入部します。1988年のソウル五輪までは日本の（男性）レスリングは世界に君臨していましたね。その後総じて、日本の男性スポーツは低迷になる。レスリングもしかりです。逆に女性スポーツは目ざましく台頭してきました。レスリングもそうです。現在日本の女子レスリングは発祥以来の快進撃を続けていて世界に君臨しています。そんな機運の中、我が関大第1号の女性レスラーも、高校時代から「柔道」と「レスリング」を経験してきた「意欲」の人物だったんです。紅一点の彼女が練習に参加するようになると、ある現象が起きました。少ない男子部員の動向が真っ二つに分かれてしまったのです。一組は、男子であることを自覚して、さらに励む。もう一組は、練習中に彼女にたまたまスコンスコンと投げ飛ばされたりするので、堪らなくなったのでしょうか、男子の沽券を傷つけられたのでしょうか、一人去り、二人去りと退部者が何人も出ました。こうした現実もあります。先輩方はどう思われますか。柏木さんいかがですか。



写真▷記念式典「祝辞」の森本関西大学常務理事
「向上への新たな道標を目指してご精進を……」

柏木 まず社会が変貌していますね。先程の指摘にあるとおり、ソウル五輪以後の日本のスポーツ界で、男性陣が低迷を続けている状況は「バブ

ル問題」と関係が深いですよ。ハングリー精神がなくなると誰もがお公家さんみたいになる。歴史が証明しています。それに反して、女性の、社会進出が盛んになってきた。1986年に男女雇用機会均等法が施行されました。それからの女性の勢いは凄い。いままでは押さえつけられていたという意識も加わっていわば進出のための「ハングリー精神」が女性にはあります。この社会変動の波がスポーツにも当然現れる。是非は別にして、「援助交際」や「ルーズソックス」や「女子スポーツ躍進」なども含めて社会現象の話題は女性に集中している。男性は後退現象すら見せています。中学生も高校生も大学生も女子の方がはるかに元気がいい。まずそんな背景を正しく読み取らなければならないと思う。つまり社会とともに、学生スポーツもレスリングも変貌しつつあるということです。これは認めないわけにいかない。これを無視したのでは、断絶が起こるだけです。そんななか、「レスリング選手」を育成していくためには、現在の社会情勢と学生スポーツの在り方問題を十分に理解した指導者が必要となるでしょう。いま日本は脱皮しなければならない諸状況を抱えています。レスリングも、スポーツ界も同じでしょう。ところで現在の関大レスリング部は、毎年、立派な卒業生を社会に送りだしていますね。これは素晴らしいことです。ただし、その数がやはり少ない。これを増やしてほしい。それに注文をつければ、これもやはり、レスリング選手としても一段と遅しく成長してほしいし、「部」としても一段と飛躍してほしいことは論外の望みです。

編集部 現実的な話となりましたが、そのうえに立って、指導陣といたしましてはあらゆる面に向上を図りたいものです。話題を「訊きたいこと」に戻しましょう。さてしんがりは木村さんです。創部当時の、村田さんとのマンツーマン方式の猛練習はつとに有名な話ですが、その経験者として、どう思われますか。

木村 ボクの現役時代の頃の話は先程のとおりだし、関大の猛練習振りは、いま横山さんが話してくれましたネ。まあボクたちが幸せだったことは、物の無い時代だからこそ、打ち込めたのかも知れない。誰だって、打ち込んでいううちに、多少は工夫もするヨ。そして打ち込みさえすれば、誰にでも、手応えがあるからネ。現在では、我々の仕事だって、そう簡単にいかないものなア。ところで押立さん、先程の日本レスリングの現状話は大変だネ。ボクは現状は余り知らない。しかし村田さんの話をよく聞いています。村田さんは、さっき紹介した自伝『俺』に書いていることを、いつも言ってるものナ。ライオンズ協会などでの講演で村田さんいつも同じことを喋っています。そんなものかなアッて、ボクいつも、訊いていたのだが、先程からの、皆さんのお話を総合すればどうやら本当らしい。だからここに「ボク」の感想の代わりとして、村田さんの思いをそのまま紹介しておきます。皆さんは既に読んでるでしょうが、大勢のレスリング仲間にも知っておいてほしいからネ。先程の『俺』は強かった」の章にはこう書かれてますヨ。



写真▷記念式典「祝辞」の寺西関西大学校友会長
「栄光を讃えて復活を祈る」

◇

いい年をして馬鹿な話である。「俺は強かった」等と、今まで考えた事もないし、よく「村田さんには学生時代シボられたもんだヨ、本当に強かった」等と他校のOBからも云われた事があるが、すっかり忘れていた事でもあり、気恥ずかしい思いをするのが真実である。『俺』は強かった」と思い始めたのは、余りにも弱い日本レスリング界の現状を見て、「何と弱い奴等だ」という反語である。

何かの指針になればと思って筆を執ったものの、考え方が次第に変わって行くようである。「馬鹿ばかしい」の思いがするのである。強化委員などという者がいるようだが、一体彼等は何を考えているのかわからない。「ダメ」という落胆のみが『俺』に伝わってくる。

或る強化委員長が惨敗のあと、しみじみと云うのである。「やっぱりタックルですネ」等と云う。今更何を云っているのだ、何年同じ事を云っているのだ。タックルを破る技術を考えているのか？相手の真似ばかりしていても、それを越える事は出来ない。「抱え込んでブン投げろ」といってみても、投げ技を知らないのだから始末が悪い。コーチは保身の為ばかりだから、真剣に強化の話をした事もないはずである。わからない奴等同士が面子に拘わっているからダメである。

「おい、基礎体力が無いんだよ。スパーリングは必要ない。基礎体力をきっちり養わなければ勝てないんだ。」

それはマットに上がった選手の体格を比べれば一目瞭然である。曰く「いや、ヤせて見えますけど、引き付けなんか強いですよ」と自己弁護する。

その「引き付けとやらで勝ったのか！」と云ってやりたいが、「止めタア……。」

「おい。試合を100見ても、投げ技が1つも見られないのは何故か？」と聞く、「未だそこまで行っていないんですネ」と他人事の様に強化委員長は云う。「ダメだあー」

「おい！組んで引っ込んで投げ飛ばす。脚力、背筋力が足りないな…」と云うと、「先輩、今のレスリングは組まないんですヨ」と真面目な顔で云うのには、返す言葉がないのである。組むとは前捌きの事をいう。笹原のレスリングは両手を自在に操る、前捌きから始まる。何の前捌きもなく頭から突っ込んでタックル等、相手はビックともしないのである。

巻き技、脚技、もちあげ技、どれを取っても組み手がなければ出来ない。舞の海の相撲をよく見ろ。何が組み手か良く見てみる。横くずしはグランドレスリングだという固定観念があるからバックを取って一息ついている。横くずしも脚取固めも『俺』にはスタンドレスリング以外の何物でもない。

マラソン2時間。テニスに至っては3時間、4時間の激闘である。それを女の子がやっている。「たかが5分間で何を考えているんだ。」そこら辺で大きな違いが起こる。組み立て通りのレスリングが出来ない奴等がオリンピックに行って何が出来るのかと思う。然しそこにも基礎体力がない事にはどうにもならない事は自明の理である。

(村田恒太郎著『俺』より)



押立さん、本当に村田さんの謂うとおりですか。そうだったら困ったもんダ。まあ押立さんは現役の副会長だから明言しづらいだろうが……。だが予測はつくネ。いまの日本社会は、無責任体制という点で、村田さんのこの話を拡大したようなものだからネ。ところで関大の状態も、いまお聞きすれば最悪だそうだが、それなりにメリハリをつけてくださいヨ。

5. 青年たちへのメッセージ

編集部 時間も押し迫ってきました。語り尽くせないことばかりですが、そろそろ座談会を閉じなければなりません。最後に皆さんに、これから

の青年たちへのアドバイスを、関大レスリング半世紀の知恵を含めて、先輩方の人生観の視点から語ってください。この「青春のパライストラ」座談会の影響が、広くあちこちの青年諸君にとって、未来の青年にとって、何かのヒントとなれば、それだけ関大レスリングの値打ちが上がるのですから、編集部としては、当然そのことを意識しておりますので、そのつもりでお願いします。それではまず、柏木さんからお願いします。



写真▷祝賀会で「閉会の辞」を述べる柏木さん

柏木 「窓の外の花は盛りに・匂うとも・文読む我は・心散らさん」と誰かが詠んでいます。就学すれば勉学に励むことは当たり前のこと。スポーツ部に入部すれば、流行の遊びなどを忘れて、スポーツにすべてを傾注してほしい。それが当たり前ではないですか。自ら選択するのですから。その結果は誰のものでもありません。すべて自分の人生の結果として、返ってくる。先輩方の築いた勝利や関大レスリングの黄金時代も決してその例外ではありませんね。レスリングの練習でも、厳しければ厳しいほど、そののちの思い出も大きい。逆に練習がいい加減なことに終始したのでは、何も残らない。また相手と同じ練習をしていたの

では、「引き分け」か「負け」に終わってしまう。相手より、より多くの練習を行い、より厳しい練習に堪え、より合理的に練習してこそ、勝利を得ることができます。この鉄則は社会原理ですよ。社会に出ても同じというわけ。先程のお話にありました、「女性レスラーに投げ飛ばされて退散してしまった男性」も、レスリングなんてたかがスポーツですが、一事が万事にわたって、この社会原理に遭遇するはずですよ。いずれ反省してくれれば、退散学生も袖を触れ合ったレスリングの仲間として、レスリングから「何か」を汲み取ってくれることになるでしょう。ところで確かに「勝利」は素晴らしいですね。勝利者は誰よりも多くの練習に堪えた者に贈られる勲章です。結果としてレスリングで勲章を得た先輩は、社会に出てから、次には仕事で立派に成功しておられます。我々の現役時代には「練習で泣いて、試合で笑え」が合言葉でした。厳しい練習に堪えた者は、社会へ出てから、どんな厳しい環境に遭遇しても、その苦難を乗り越え、それをバネにして成功しておられます。現役諸君も頑張って、先輩方を追い越してほしい。期待しています。

編集部 木村さんいかがですか。

木村 ボクの好きな言葉にこういうのがあります。確か杜甫の漢詩の一節ではなかったかとも思うが、思い違いかもしれません。まあ紹介しておきましょう。「力耕不吾欺」という言葉です。「努めて田畑を耕せば、自然の力は、必ず実りをもたらしてくれる」が転じて「努力は人間を欺くことはない、努めよ！」と謂う意味でしょうか。特にこれからの若者がこの言葉「力耕不吾欺」の真意を肌で実感することを期待したいネ。ところで50年間はあっという間の出来事でしたネ。振り返ると、いまでも背筋がゾクゾクするような経験をレスリングをとおして、実感してきました。感慨無量のことです。時代が変わっても、若者が打ち込

むところに、何か生まれ、何かを受け継がれてほしい。そうだね。この座談会が収録される「50年史」をできるだけ多くの、これからの青年に読んでほしいナ。我々には骨髓に刻み込んだ「ことがら」ばかりだから、酒の肴にすればいつでも脳裏から鮮明に浮かび上がってくる。だから、我々に「50年史」はあまり必要ない。だが我々の子どもたちや、これからの関大レスラーや、あるいは見知らぬ青年たちには、是非ともページをめくってほしいヨ。皆さん、そう思わない。よし、いいことを思いついた。それは関係者一人ひとりの「自分史」だから、まずOBの一人ひとりが家族や親戚に読んで貰うように紹介しようじゃないか。案外、これからの青年たちに、残しておきたいメッセージとは、その「本」に詰まっていると思うネ。どうでしょう！賛成してくれますか。

一同 はい！大いに賛成します（拍手）。

編集部 先輩！プレッシャーをかけないでください。お願いしますよ。現在では、まだ、80パーセントの仕上がり状況でこれからが追い込みです。まあア、できるかぎり先輩方の御意に適いますように、せいぜい精を出します。お約束しておきます。それでは、横山さんから、メッセージを頂戴しておきましょうか。今の木村さんのお話で、メッセージの伝達の意義が明確になったわけですからそのつもりでお願いします。

横山 オイオイ、あなたこそプレッシャーをかけてるではないか。それは、ないヨ！（笑い）今回の50周年記念行事の計画を立ててから、OB各氏は、本当によく協力してくれました。本当にいま不景気でしょう。私の家業も大変だもんね。そんななかをあと数時間もすれば立派な記念式典が始まる。またいま例えば「50年史」も80パーセントの仕上がりで間もなく完成となるでしょう。楽しみなことです。OB諸氏のご協力がないとこん

な芸当はできないでしょうね。これが伝統だなアと、ひしひしと感じます。関大レスリング部の現状はさっきからのお話のとおりですが、この関大レスリング部関係者が誇ってよい、一枚岩の良き伝統を、是非ともこれからの関大レスラーたちにも、引き継いで貰いたいと思います。本音でネ。それに、これからも、みんなで集まって一杯呑みながらワイワイやりませんか。そこにこれからの若者を、順繰りに招いて、我々の話を聞いてもらうだけでメッセージが伝わるではありませんか。私なんか、いまだに、本日お集まりの皆さんのお話に接するたびに、正直に、そう思います。本物の話は、いつの時代にも、輝きを失わないものでしょう。そう、これからの若者にも、その本物を見つけてほしい、だから「本物を見つけてください」の言葉をメッセージにしておきましょうか。そのためにも、我々が、本物に拘わることにしましょうよ。そのためには、関大レスリング部OBは、あちこちで集まって一献かたむけるべし。

一同 そのとおり！（拍手）。おおいにやりましょう。おおいに！



写真▷祝賀会「挨拶」の福本関大体育OB会長
「継続は力なり……現役諸君の奮起を祈る」

編集部 それでは押立さん、お願いします。

押立 私は、52年間を、レスリング一途にやってきました。しかし当初からこんなにレスリングが好きであったわけではありません。ときにはエスケープもし、レスリングが嫌になったこともあります。しかし私は、レスリングとは、するスポーツであり、スパーリングで汗を流すうちに喜びがあり、面白さがあるのだと思います。私には若い人に絶対に勝てないものがあります。それは「若さ」です。若い人達はその特権を大切に有効に使ってほしいと願っています。レスリング競技は最も「意外性」の少ないスポーツと謂われています。私は、若者のもつ意外性に、明るい期待を寄せております。私自身もたびたび、明るい、嬉しい、若者の意外性に接する経験をさせていただきました。いま日本の社会ではボランティア精神が強く求められています。部活でクラブでレスリングを体験することは、ボランティアスピリットを無意識に身につけることになると思います。私は「継続は力なり」を信じ、若きレスラーすなわち青年諸君に、強い信頼と限りない期待を持っています。それが、老体の私でも、いまだにマットに上れる原動力になっています。現在まで歩んできた道にはまったく悔いはありません。青少年の皆さんに是非とも語りたい。目標を持って一步一步前へ進みましょう！そこには、明るい、あなたの未来が待っています！少しばかり形式的だが、こんなメッセージを伝えておきたいものです。

編集部 それではいよいよ最後になりました。OB会長の清谷さんに締めくくっていただきたいと思います。

清谷 先程、横山副会長が、今次の「50周年記念行事」に関して、ご厚志をいただいておりますOB諸氏の「伝統の力」について触れられましたが、会長といたしましても、本席をお借りして、

感謝申し上げておきたいと思います。さて「克服」という言葉があります。意味は「困難に打ち勝つこと」ですね。その恰好の事例を紹介したいと思います。南部忠平さん（1997年没）のお話です。南部さんが1932年のロサンゼルス五輪の三段跳びで金メダリストとなったことは我々世代にお馴染みですね。その南部さんに、或る小学校で講演していただいたときに、その小学校へ贈られた南部さん直筆の色紙に書かれたのがこの二字でした。南部さんは北海道の出身者で冬は練習前に百メートルの助走路の雪除けをされたそうです。もともと走り幅跳びの選手だった南部さんは、百メートル助走路をいかにスピードをあげて走るのかが重要だった、と言っていました。その凍てついた助走路が南部さんの生命線だったんですね。だから屋外の零下何十度ともなることもある厳寒のもとで、南部さんは、自分の身体を手入れするかのよう、コソコソと丁寧に除雪作業を来る日も来る日も続けたい。さぞかし重労働だったことでしょうね。この重労働を克服できたのは、目標を定めて、その実現を目指して、挑戦する気持ちをふり立たせ続けてきたからこそだ、と講演会で南部さんは告白していました。日本では、いつの頃からか、「汚い、厳しい、危険な」3K職場を嫌うという風潮が根づいてきました。なぜでしょう。これは、「清潔で、安楽で、安全な」文明社会から生まれた精神の歪みかもしれませんね。文明の有り難さと、豊かな社会から受ける恩恵に浸りすぎて、人間の心身が軟弱になっているせいかもしれませんね。これからの青年諸君に告げたい。心身の健康は人生を豊かに充実させてくれます。その心身の健康は決して他人から与えられることはできません。自分で鍛えるしかない。関西大学の現役諸君！「克服」の二字をよく噛みしめてほしい。「レスリング」、この外連味のないスポーツ、地味ではある。だが、精神力と肉体を鍛えてくれる。その度合いは、いずれのスポーツにも優っている。最高のスポーツである、とすべての先輩

諸兄も謂っている。南部さんが目指した、あの「飽くなき挑戦心」。その心をもってほしい。関大レスリング部の夜明けを、現役諸君、あなたがたが率先して切り開いてほしい。その「克服」こそは、誰のためにでもない、問題は、諸君自身のためにあるのだということです。

編集部 早朝から、午後の式典開始直前まで、長時間にわたって有り難うございました。本日の座談会の内容は、編集部（柏木貞夫・伴義孝・佐藤秀雄・北川俊治・横山博行・安田忠典）で整理して、「50年史」に掲載させていただきます。その際に、語句などについて多少の修正を施させていただきますが、あらかじめご了承ください。また司会の不手際をお許しください。貴重なお話を有り難うございました。それでは、「関西大学レスリング部創部50周年記念座談会」をこれで閉じさせていただきます。



写真▷記念式典「謝辞」の高堂関大レスリング部長
「創部の志をふたたび継承する責任を痛感……」



編集部からも、上記の座談会を整理して「下原稿」をまとめたこの段階で、これからの「青年たちへのメッセージ」として、少しばかりの前置きに続いて次の言葉を捧げておきたいと思います。



本書は、一握りの人間集団が歩み伝えてきた、オリンピックでのゴールドメダリストをも輩出するに至る栄光の記録でもある。そのスポーツ界における頂点をも極めた「苗床」こそは、謂うまでもなく、その一握りの人間集団の一人ひとりが蒔いた一粒一粒の種から育ったものである。だがその半世紀の記録には、「部」の存続に関わる、危機的状況も数次にわたって報告されている。その意味で本書には、「頂点」から「どん底」までの振幅を語る人間ドラマが満載されていて、まさに「青春のパライストラ」と題するに相応しいものといえよう。それは、一人ひとりの執筆者が、一人ひとりの資料提供者が、「本物」を伝えてくれているからにほかならない。さて「苗床」は、関西大学のキャンパスを道場として、レスリングマットを道場として、半世紀の間に「田畑」へと培われ耕されてきた。その間には、大きな収穫もあった。その間には、春嵐も夏嵐も秋嵐も冬嵐もあった。さらに「苗床」本体が枯れそうになったこともあった。だが「種子」は、半世紀を歩んできた仲間たちの一人ひとりの「血肉」のなかに受け継がれてきている。その「種子」と「苗床」と「田畑」の意味するすべてが、本書には、詰め込まれている。だからこそ、できるだけ多くの人々に読まれてほしいと願ってやまない。



**青年は、未完成である
だから明日があるのだ
だから魅力があるのだ**



この箴言は、大島鎌吉さん(1908. 11. 10~1985. 3. 30)が好んで語った「青年たちへのメッセージ」である。大島鎌吉さんもまた、関西大学を道場と

して、自らを育んだ「スポーツの人」であった。その先生の略歴を箇条書きにしておきたい。

- ▷ 関西大学法文学部卒(昭和9年)
- ▷ 1932年ロサンゼルス五輪・「三段跳び」銅メダリスト
- ▷ 三段跳び「15.82 m」の世界記録保持者
- ▷ 1936年ベルリン五輪・日本選手団主将
- ▷ 毎日新聞社：政治部記者・運動部記者
- ▷ ベルリン特派員：第2次世界大戦中の6年間をドイツ軍従軍記者として活躍
- ▷ 第18回東京五輪招致運動の中心人物
- ▷ 日本のレクリエーション運動の推進者
- ▷ 日本スポーツ少年団の創始者
- ▷ 東京五輪「選手強化対策本部」本部長
- ▷ 東京五輪「日本選手団」団長
- ▷ 体力づくり国民会議の発案者・議長
- ▷ 世界の「Sports for All運動」の先駆者
- ▷ オリンピック平和運動推進者
- ▷ 「オリンピック平和賞」受賞者
- ▷ 「オリンピック功労賞」受賞者

そして大島さんは、我々の、関西大学の、みんなの、世界の、スポーツの仲間であった。大島さんは、死線のベルリン特派員生活から、戦後、引き揚げて帰ってくると、まもなく「東京オリンピック大会」の招致運動に取り組むことになる。「日本の少年に夢と希望をもってほしい！」それが大島さんの願望だった。敗戦直後の一億総懺悔で日本の社会は重苦しく暗かった。日本の明日を担う少年たちには意覚を刺激する何かが必要だった。大島さん、その「何か」を、オリンピックに託した。世界の平和の祭典を日本で開催して、日本の少年たちに「明日を睨み据える活力」を与えたい。大島さんの願望だった。その東京五輪で、現場の最高責任者となった大島さんは、「金メダル15」の公約を掲げた。陣頭指揮をとる大島さんは、スポーツ先進国より、「スポーツ科学」をどしどし

上陸させた。公約を果たすための強化対策の一環ではあった。戦略は実った。関係者は、大島さんを評して、「日本スポーツ再生の親」「スポーツ界きっての頭脳」と謂っている。結果は公約を上回る「金16個・世界第3位」であった。そのうちの1つを、我がレスリング部OBの市口さんが取っている。大島さんも、その関大の後輩の金メダル「1つ」に大いに眼を細めていた。

東京五輪の終結は、大島さんの仕事の、始まりを意味していた。それこそが、前出の「大島箴言」に謂う、「青年」への期待である。大島さんの眼は、常に「青年」に、常に「少年」に向けられていた。そんな一生だった。このような仕事をしてきた大島さんに訊いてみればいい。関西大学レスリング部の半世紀にわたる「青春のパライストラ」を、どうお思いだろうか、と。きっと大島さんは、それは「近代オリンピックの創始の精神」に比べても遜色ないよ、と、これにも眼を細めて答えてくれることだろう。

1世紀前の1896年、第1回近代五輪アテネ大会が、クーベルタンの発案で、創始されている。クー

ベルタンの理念は青少年に向けられていた。当時のヨーロッパ社会は、主知主義の横行で、「不安の時代」「危機の時代」に進みつつあった。そして青少年の「生きる力」も枯渇しつつあった。クーベルタンは、この状況打破のための教育施設として、平和志向を前面に押し出していた「古代オリンピック理念」を甦らせたのである。クーベルタンは、当時の時代精神を刷新するために、その「平和志向」に加えて「教育志向」をプラスするという「新風」を吹き込んだのだ。

大島さんの視座も常にこのクーベルタンの理念と軌を同一にしていた。だから大島さんに、訊きだすならば、関大レスリングの半世紀は、青年のための、人間形成の歴史にほかならないと、すべてを要約してくれるだろう。その歴史は、「青年は、未完成である。だから明日があるのだ。だから魅力があるのだ」というその青年たちの無言の自覚によって、加えて青年たちを支援する人々の無言の自覚によって、淡々と連綿として「青春のパライストラ」で創造されてきたのである。

(完)



写真▷「かつての精鋭たち」・1997年11月24日「関西大学レスリング部50周年記念式典」・大阪厚生年金会館